

岐路に立つ職業訓練の実情を目のあたりにみて

I. H総高訓のA君のこと

筆者「どうですか、総訓での生活は？よく勉強できますか？」

A君「……………この授業はねむい……………」

「定時制高校にもいっているのだそうですネ。昼ここで勉強したあと夜も勉強するのはなかなか大変でしょう。」

A君「……………商業の方はいくらか面白い……………」

筆者「あア、定時制は商業にいらっているのですか。ここでの勉強とはずい分調子もちがうでしょう。どうして商業を選ばれたのですか。」

A君「……………さあ、数学と珠算とがまあまあだったので……………」

筆者「ここでは木工を勉強しておられるようですが、卒業後はやがて独立して木工所でも経営するとか、そんな計画をお持ちなのですか。」

A君「……………別に……………」

筆者「総高訓と定時制高校の両方に通学して、よかったと思われる点、どんな点でしょうか？」

A君「……………どうかな……………」

筆者「ずい分重荷で大変でしょう。」

A君「……………ハア……………」

筆者「どうして総高訓では木工、定時制は商業という選びかたをされたのですか？」

A君「……………自動車整備科からまわされた……………」

筆者「進路はいつごろ決められましたか？」

A君「……………3年になって何んとなく受けてみようと思った。」

筆者「中学校、総高訓、定時制高校ではどこが一番楽しく張りのある勉強ができると思いますか？」

遠くをみつめるような眼差になり、ニコーッと口許をほころばせ、「中学校。」

以上は、H総訓で諸々の検査をおえたあと、中学校調査の対象になった6名の訓練生1人1人と面接をおこなった際の面接場面の一部を再現したもの

である。

A君は、からだ小さく、なんとなくひよわさの感じられる訓練生で、彼が更に毎朝新聞配達までしていると聞いた時には、まさに「おどろき」であった。感心するまえにいたいたしさが感じられてならなかった。それで特に強く心に刻み込まれたのであろう。今もその時の光景が目につく。

彼は新聞店の一人息子で、2人の姉がいる。知能偏差値は京大NXで41、中学校時代の学業成績は、国語、数学、理科、技術がそれぞれ、1、2、1、1。行動及び性格の記録は、責任、根気、指導の各項がそれぞれC、あとは全部Bと記録されていた。担任所見の欄には、「末っ子でやゝ我ままなところがあるが、作業熱心」とか「家の仕事はよくやり、気のよいところがあるが、何事にも熱心さを欠く。」といったことが記されていた。

中学校の担任の先生は、「とてもいい子でした。教科はあまりよくありませんでしたが、やさしさのある子で、掃除や作業をさせると実によくやっていました。新聞配達などもやっていた子で、給食費から自分の着る衣服代にいたるまで、自分の働いたお金で買うといった、そんなところのある生徒でした。貯金もずい分していましたよ。総高訓へ行くことは、自分できめたはずですが、情報は友達から得たようでした。本人は自動車整備科を志望していましたが、総高訓で木工科にまわされたようで、ショゲていました。定時制の商業にも行きたいと行ってきたのは、それからずっとあとのことだったと思います。姉達がみんな高校に進学しておりましたので、君もどうだ行く気はないのか、といったこともありましたので、願書はA君の希望通りに書いてやりました。」と別に資料をひっくりかえすこともなく実にくわしい説明をしてくれた。

総訓の担任の先生は、A君はまじめではあるが、遅刻が多いこと、性格的に弱いところがあり、専門学科・実技の成績が思わしくなく、気がかりであること、朝新聞配達をしたあと総高訓に行き、そのあと更に夜定時制へ行っているのでは、荷がかりすぎているのではないかと心配していること、などA君についてはこれ又大変気にしておられた。

A君自身の話では、新聞配達も別に家の経済を助けるためにやっているわけではなく、ただなんとなく小遣いかせぎと貯金をするためにやっているとい

うことであった。

はじめ、中学校の担任の先生にお会いし、話をうかがっていると、A君はいささか「美談の主」めいてくるのであった。それに集めた情報にはいささかくいちがいもみられる。それで、この「美談の主」に一回あってから帰りたいと、わざわざ日程を変更し、ついでに中学校調査までさかのぼったケース訓練生6名の1人1人に直接あってみたいという気になったのであった。

ところが、先に記したように、私の目の前にあらわれた青年は、いささか青年らしからざる青年で、中学校の先生方の話しからえた私のイメージとかなりちがった感じの訓練生であった。A君は、こちらがやさしく話しかけていく時には、たしかに、ニコッとこぼれるような笑顔で反応してはくれた。しかしすこし話がめんどうになってくると、とたんに自信を失ない、落ちつきのない目つきで、こちらの顔色をうかがい、おどおどした態度になってしまうのであった。そして、時々、ちらっと外をみて「フッ」とため息をつくその姿には明らかに「疲労」と「困惑」の色が読みとれるのであった。

I 高卒中心の訓練校における中卒訓練生の問題

A君の印象は、H総高訓で面接した6名の訓練生のなかでも特に記憶に残るものであった。しかし、高卒訓練生がすでに6割近くを占めるようになったこの総高訓では、中卒訓練生の存在は、概して問題の多い存在のようにみうけられた。ちなみに、他の5名の中卒訓練生のIQその他を示すなら、それは次のようなものであった。

B君、C君、D君、E君、F君のIQは、京大NXで、それぞれ113、84、83、75、96であり、中学校時代の学業成績の方は、IQ113で自動車整備科に入ったB君が、国語、数学、理科、技術の各科においてかろうじて2、2、2、3の成績をおさめている以外、1と2ばかりという低迷状態にあった。それはいずれも男子クラスメート20～23名中、19～21位を占めるもので、最下位だけはかろうじてまぬがれるといったものであった。いわゆる科学・技術の裏づけを必要とするといわれる今日の技能者になるためには、明らかに基礎学力の点で問題の多い生徒達のようにみうけられた。

こうした状況の中卒訓練生が、高卒訓練生にまじって「まあまあ」以上の成績をあげること、それは、彼等自身にとっても又指導員にとっても大変な仕事であるように思われてならなかった。

事実、B君は、中卒訓練生の中ではトップクラスに属し、総高訓の担任の先生も「中卒訓練生としては全くいうことなしです。」と折紙をつけておられた。しかし高卒訓練生と較べるとやはり、いろんな面、とりわけ専門学科等において見劣りがするということであった。

幸い、A君を除けば、あとの5人は総高訓に入ったことを「よかった」といっており、総高訓の先生方の努力のほどがうかがえ、頭の下る思いであった。先生方と個々の訓練生について話してみると、先生方が、これらの家庭的にも、経済的にも、又才能の点においても恵まれることの少なかった中卒訓練生をいかに同情の念をもって指導しておられるかがよくわかった。実技だけでも何とか1人前にしようと苦斗しておられる姿が今もまざまざと目に浮ぶ。

と同時に、中心が高卒訓練に移行しはじめた訓練校における中卒訓練生の今後の問題が新たななる問題として感じられるのであった。

D君もA君同様、新聞配達をやり、更に定時制高校に通学していた。彼の「総訓と定時制では定時制の方がやりがいを感じる。」「訓練校はなんといっても高校とはちがい、大きな顔ができませんからネ。」といった言葉が今だに耳もとからはなれない。D君はA君とはちがい元気であった。しかし、朝新聞配達、昼総高訓、夜定時制高校という生活は、あまりに負担が重すぎるように思われてならなかった。ただ「新聞配達の方はやめたいのですが、14万円で買ったバイクの月賦を払うためにはやめたくともやめられない。」という、うちあけ話を聞き、ホッとするとともに、それでもなお何かしこりのようなものが心の奥底に澱んでいくのをどうすることもできなかった。

Ⅲ F総高訓で感じたこと

F総高訓は創立当初より高卒訓練を中心として設立された数少ない総高訓である。現在7割近くが高卒訓練生で占められている。

高卒訓練生が中心であるということで確かに一つの共通した特色のある総

高訓ではあった。しかし、その内容をもっとくわしくみてゆくとおどろくべき多様性をもっていることに気づかされた。例えば同じ電気科の訓練生ではあっても、私立の工業高校で電気科を終了して入ってきたものから、公立高校の普通課程をおえたもの、公立高校の農業課程、私立高校の商業課程をおえたものと、実に多様な訓練生をかかえこんでいる。それだけで、F総高訓の先生方のご苦労が目に見えるようであった。

ただ、これらの訓練生が、どうして訓練校に入ってくるようになったのかその経路をたどっていくうちに、なるほどとうなづける点が出てきた。というのは、彼等の素質その他を調べていくうちに、彼等が何故に技能職を選ぶようになったのか、その必然性ともいべきものが感じられてきたからである。

次の5名は、高校、中学と逆にたどってゆき、彼等の記録にあたり、更に担任教師等から直接情報を得ることのできた訓練生達である。彼等の出身高校は、私立の普通課程、商業課程、公立の普通課程、農業課程と実に様々であった。ところが、中学校当時までさかのぼってゆくと次に示すようなデータが得られた。（次頁）

彼等が、A君をはじめとするH総高訓の中卒訓練生とくらべ、はるかに今日の技能職に向けた素質の持主であることがよくわかる。又、彼等1人1人と言葉を交してみるならば、いかに彼等の方が自分をみつめる目が確かなものとなっているかはっきりしてくる。もはやA君のようなあいまいな態度はほとんどみられず、彼等の進路決定のプロセスには、「なるほど」とうなづかされる点が非常に多くなるのであった。

	出身高校	知能 偏差値	国 数	理 技	生	自 主	責 任	根 氣	自 省	向 上	公 正	指 導	協 調	同 情	公 共	積 極	情 緒	摘 要
Ok 君	私立 (普通)	59	3 3 3 3	3 3 3 3	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	B B B B B B B B	まじめ、がまん強い。
S	私立 (商業)	47	2 2 2 2	2 2 2 2	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	B C B B C C B C	基礎学力とほしい、もともと公立の工業高校進学を希望していたが失敗
O	公立 (普通)	59	3 3 3 4	3 3 5 4	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	A B B B A A A A	もつとのびのび 明るく学習しなさい
Ma	公立 (農業)	51	2 3 3 4	2 3 4 4	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	B C B B B B B B	大変のんき 人のあとについてゆく
Mi	公立 (普通)	67	3 4 4 3	3 4 4 3	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	A A B B B A A A	おとなしいがしっかりしている。 温順 すなお

IV F 総高訓の先生方の悩み

—X先生のこと—

だがしかし、それにもかかわらず、F 総高訓の先生方の悩みは、H 総高訓以上のようにおみうけした。F 総高訓には、大学卒の若い指導員が多かった。これはF 総高訓の創設の事情（高卒訓練を最初から本命としていた）から当然のことではあった。しかしある大学を出たての若い指導員は、私の顔を見るなり、「何かよいよい説教法なんぞというものはないものでしょうか？」と質問してきた。とにかく訓練生を掌握することが大変なのだそうである。新任の校長先生にとっても、なかば大人になりかけた訓練生の把握は最大の関心事とおみうけした。抱負をおききしたら、とっさに「規律の確立です。」という返事が返ってきた。様々な教育を受け、様々な教育要求をもつに至ったなかば大人の訓練生を、教育的にどう組織していくか、どうすれば、一つの筋の通った訓練をしていくことができるか、そのことが最大の課題となっているものと理解された。

大学で助手の経験もおありのX先生は、「最大の問題はカリキュラムの問題なのです。工業高校ですでに通りの専門を履習してきたものから、普通課程、農業課程をおえ専門知識は何ももっていないものに至るまで、一緒に教えなければならぬのです。しかし、カリキュラムの骨格は、依然中卒訓練生を対象としたものに手を加えるといった程度にとどまっており、どちらかというとならば画一的な訓練が行なわれているのです。これで彼等が満足したらそれこそおかしなことです。そうじゃございませんか？」と問題の核心をつかれる。

「今、私にとって一番おそろしいこと、それは、訓練生が彼等の母校に帰り、大学や短大に進学した友人と話し合い、総高訓でのやり方と大学、短大でのやりかたとをいろいろ話し合い比較しあう機会をもつことです。」と心配され、更に次のような見解を表明されるのであった。

「これまでは、職業訓練は後期中等教育の中に正しく位置づけられるべきであるといった議論がなされてきたようです。しかしもはやそんな時代ではなくなってきているんです。連携訓練にしたところで、高校との連携などしてみてもはや無意味だということです。われわれのところなど、もし真剣に

今後のことを考えるのならば、大学の工学部あたりと話しあう必要すら感じます。つまり、工学部の教授、助教授に非常勤講師でもきてもらい専門学科の一部を担当してもらおうといったことをやって、ちっともおかしくないと思うのです。いやそうした試みは今すぐにもどんだんなされてしかるべきだと思われてならないのです。そして我々がそうした方向にもっていく努力をしなければとさえ思うのです。しかし、今のような勤務条件の中では、そんな役割を果たすことはとうてい不可能なんです。だいたい毎日やる講義の下準備さえ満足にできないありさまなのですから。実習の時間をいじってみたり、専門学科のある部分を科の壁をこえて再編したりして、出来るだけ指導員が研修の時間をもてるよう努力はしているつもりです。しかしとてもそんな程度の手直しではどうにもならないんですネ。」

X先生の悩みと心配は際限なく広がってゆく。そして先生のお話をうかがえばうかがうほど、問題は、1指導員否1訓練校の努力の範囲を越えるものであることが、実感されてゆくばかりであった。

F総高訓の場合、訓練生の立場から、問題をみていくかぎり、X先生の主張されるように、訓練の内実は実習を重んずるユニークな工業短大的なものとなる必要があり、後期中等教育などというよりは、高等教育の一環として正しく位置づけられる必要があるように思われてならなかった。思えばこれも驚くにはあたらない当然の傾向なのであろう。というのは、アメリカをモデルとしておし進められた戦後の教育改革が定着し、高校進学率がすでにアメリカなみになろうとしている今日、職業訓練の機能がアメリカ並に高等教育レベルにおしあげられるようになったとして、ちっとも不思議ではないからである。いってみれば、今日F総高訓が直面している問題は、実は戦後の教育改革の当然の帰結であり、当然予定される問題ではなかったろうか。

とするとこれはX先生1人、又はF総高訓1校のみの問題としておくにはあまりに重大すぎる問題であるように思われてならなかった。というのは、X先生の悩み、F総高訓の問題は、早晚、全国の職業訓練校に波及してゆく性格のものであり、この問題が解決されないかぎり、職業訓練の問題の根本的解決はありえないように思われたからである。

つまり、この問題が解決されずに回避されるならば、職業訓練校は、訓練

そのものよりも、訓練生集めに多大のエネルギーを費さざるをえなくなり、現に落ち込みつつある悪循環に完全にはまり込むことになろう。しかし、もしこの悪循環から抜け出すことができなければ、当然のこととして、「技能尊重の風潮の醸成」も「技能者の地位の向上」も、とうてい到達しえないものとなり、そのスローガンは全くしらじらしいものとなってしまふ。そんな思いが私の胸のうちを去来するのであった。

V H総高訓、F総高訓をとりまく状況

— H県職業訓練課長K氏の談話 —

以上、H総高訓においては中卒訓練生を中心に、F総高訓においては高卒訓練生を中心として調査を行なった、その際に感じたことをそのまま書き記してみた。ところで、実はこの高卒訓練生を多数かかえているH総高訓（高卒訓練を特に意識して設立されたものではなかったが、高卒訓練生が60%近くを占めるようになった）もF総高訓（はじめから高卒訓練を意識して設立され、その割合は70%近くになっている）も共に同じ県、つまりH県にある総高訓なのである。

そこで、こうした問題の生じた背景を明らかにするため、H県の職業訓練課長K氏にご登場願ひ、H県の専修訓練校の問題について、お話をうかがうことにしよう。以下は氏の談話を出来るだけ忠実に再現したものである。

「わが県の県訓は、今や、前進も後進も出来ないドロ沼にどっぷりつかつた車のようなものであり、クレーン車が来てひきあげてくれるのを今か今かと待っている。（クレーン車とは何ですかという筆者の問いに、それは、国の援助ですと答えられた。）しかし、クレーン車はソッポを向いていて一向にきてくれようとしなない。

わが県は、東京都の94%について高校進学率が高く、今年については93%になりました。理論的にいえば、わが県訓もここらで中卒訓練から高卒訓練にきりかえなければならぬ時点にきているといえます。

しかし、現実には、訓練生の80%は中卒訓練生に占められており、高卒訓練生は20%にすぎず、高卒訓練生が中卒訓練生にまじって訓練を受けているというのが実状です。このような状況では、高卒中卒の分離訓練さえむ

ずかしいのです。将来をみこして中卒訓練から高卒訓練にきりかえる必要があるとは思っても分離訓練さえ実践できない現状では、そんなことはとてもおぼつかない話といわざるをえないのです。

というのは分離実践ができないのは予算がつかないためであり、その予算さえつかないのに高卒訓練にきりかえる予算などつくはずもないからです。高卒訓練にきりかえるといえば短大の教授並みの指導員をまずそろえなければなりません。できっこないですよ。現状では、施設設備の充実はおろか、定員1人動かすことさえ大変なのです。定員をふやすことではないんです。ただ動かすことさえ出来ないんですよ。というのは、県訓の改革はまず統廃合からと思いきやそれをはじめようとしたら、それが又大変なんです。事務員の定員を動かすのならいざしらず、指導員の定員を動かすことは、それがたった1人の定員であっても容易なわざではないんです。

たしかに、国も高等訓練課程を置くようにとはいつています。しかしそのための予算措置は全然講ぜられていません。知事もほんとうにやる気があるのかどうかはなはだうたがわしい。方針はいつも流動的でとらえどころがなく、こんな時下手に動けば責任問題となりかねません。

中卒訓練については実業高校との連携計画も進められており、現に1、2その試みもなされてはおります。しかし、それが現実的に動きだすのは、まだまだ先のことといわざるをえません。

本当にこんな状態では、中学校の先生方も本人や父兄に職訓に行くように本気ですゝめることはできないでしょう。無理もありません。

同じ1人の中学生を、民間企業は大企業から小企業にいたるまで、学校は公立高校にいたるまで、それぞれ手ぐすねひいてとろうとねらっているのです。向うさんは、それぞれ実質的な見返り品を準備しているというのに、こちらは、ただもう最敬礼一つしかないんですから話になりません。技能士補ぐらいではどうにもなりません。

そうです、なんといっても最大のネック、それは何も資格らしい資格がとれないというところにあるんです。

高卒訓練への移行のこともいろいろ考えてはみました。しかし、国が総訓さんの保護政策をやっている以上、それに対抗してみても結果は見えすいて

います。県内には総訓が2つもあります。たしかに就職予定の中卒者は2000しかいないのに、高卒者は1万5000人います。しかし、そのうち、県外就職がどんどんふえ、大学進学率は今こそ30%ですが、これ又ふえると思います。とすると県訓に呼びこめる数はそれほど期待はできないのです。総訓さんには高卒をまかして、中卒はわが方だと考えたこともありました。しかし、私がそんなこと公けの席で発言してごらんを下さい。きっと今県訓にきている20%の高卒訓練生も手ばなす気かと、県訓の指導員にどなりこまれるにまわっています。社会増の大きな東京や神奈川のような場合なら、立川方式とか、神奈川方式みたいなことも出来るでしょう。しかしわれわれのところではそんなこと、出来るわけがありません。

そんな分析をしていくと、細々ながら現状維持を続ける以外、方針のたてようがなくなってしまうのです。

で、1日訓練生の制度を考えついたり、技能祭をやってみたり、訓練生獲得の目的も兼ねた意識調査をやってみたりしてお茶をにごすことになってしまっているのです。何とも大変なことですよ。」

こうした調子で、K氏は、こちらに質問の余地すら与えずに、1時間以上にわたってそれこそ、立て板に水といった勢いで県訓の窮状を説明してくれたのであった。

Ⅶ 中学校、高等学校の先生方の職業訓練校観、総高訓観

では、K氏が、本気で本人や父兄に職訓をすすめてくれる先生はまずいないだろうといていた、その当の先生方は、職業訓練、とりわけ総高訓をどのような目でみているのだろうか。

今度調査で訪ねた中・高の先生方は、なにはともあれ、教え子達の何人かを総高訓に送りこんだことのある方々ばかりで、職業訓練には好意をよせておられる先生方達のみであった。

しかし、総高訓が、基幹産業分野の中小企業向けの技能者養成を主たる任務として設立されたものであることを正しく理解している先生方は極くまれであった。

それでも先生方の総高訓観は、次の三つの類型のいずれかに分類しうるよ

うに思われた。

その第一は、交通の便もあまりよくない郡部の中学校の先生方によくみられるタイプのみかたであり、職業訓練施設は、経済的に貧しくとても高校へ行くことの出来ない子供のためのもの、というみかたである。このようなみかたをする先生方が今でも意外に多いように思われた。このタイプに属する先生方は、高校にはやれなくとも職業訓練校にはなんとかやれるという貧困家庭が層としてまだまだ残っており、今後もけっしてなくなることはまずありえないと考えるのであった。又こうしたみかたをされる先生方の大部分は、職業訓練施設が能力の劣ったものにとっての「特別授産所的機能」をも当然引き受けるべきだと期待しており、われわれにとっては、明らかに異質と考えられる二つの機能をともにあわせもつよう望んでおられるようであった。これは、この第一の類型に属する先生方のみかたの一つの特徴をなすものであった。この類型のいま一つの特徴は、H県における93%という高い高校進学率は、そもそも一つの異常現象であり、人々のあやまてる教育観の所産であるとも、職業訓練は高校から生徒をうばいもどすべきであると主張、職業訓練に声援を送ってくださるのであった。考えさせられたみかたではあった。

第二の類型は、職業訓練校を1種の短期技能高校とみるみかたである。この類型に属する先生方の中に職業指導主事の先生が多く、彼等はできれば総高訓が3年制となり、正規の高等学校となることを期待しておられるようであった。そしてもしそうなれば、「進路指導もやりやすくなるし、職業訓練関係の方々も訓練生募集のため中学校をわざわざ廻るといったこともしなくてすむのでは」といって下さるのであった。

この類型に属する先生方は、当然、いわゆる多様化政策には賛成の立場に立つ方が多かったが、その数はさほど多くはないように思われた。

第三の類型、それは、高等学校教育はもはや事実上義務教育となっていることを卒直に認める先生方に多く、職業訓練のようにすぐれて専門化された教育訓練は、もはや職業課程といえども、基礎教育でしかありえぬ高等学校

教育の当然あとにくるべきものであり、そのような変化の方向は当然好ましいものとするみかたであった。

この類型の先生方が、H県では、郡部の中学校の校長先生の中にも、高校の職業課程を受け持つ先生方の中にも見い出されたことは、今回の調査における1つの発見でもあり、又特に興味深く感じたことの1つの発見でもあり、こうした先生方は、いうまでもなくF総高訓のあり方をそれなりに高く評価しておられ、中には、現在の大学問題等とも関連づけ、高等教育の空洞化現象を阻止するものであるとさえ力説されるのであった。

そして、こうしたみかたをされる職業高校の先生方の中には、私立の工業高校の電気科を卒業しながら、更に同じ総高訓の電気科に入ってくるものいる事実について、それはむしろ当然のことだとみる先生さえおり、すくなくならず驚かされた。ある先生は次のようなことをいわれた。「現行の高校教育の枠内では、徹底した実技訓練は不可能であり、それはしかたのないことだと思います。というより、仕上げは結局企業内教育でやってもらうのが一番よいのだと思います。とはいっても、それをできる企業は、それほど多くはないのです。F総高訓のような職業訓練施設は、そうした意味でも必要なものだと思います。」

又農業課程、商業課程を担当しておられる先生方の中には「もともと工業関係に進もうと希望していながら、学業成績の関係で意に反して入ってくるものが、毎年かなりいて、卒業に至るまで、その望みを捨てきれないでいるものも毎年かならず、何人かでてきます。そうした生徒の望みをかなえさせてやるためにも、高卒のための職業訓練は必要だと思います。」と話される先生もあり、筆者の注意をひいた。

こうしたみかたをされる職業課程の先生方は、概して、第二類型の先生方とは異り、卒業後の資格そのものには、さほどの関心をしめしておらず、形式よりは、まず教育訓練の内容の充実だと主張しておられた。しかし、そこに一つの甘さが感じられたことも確かであるが、それは筆者の個人的見解でもあり、別の機会にゆずることにする。

Ⅶ 職業訓練の改革は、「はげしく、そして、おおらかに」

最後に、高卒訓練中心のF総高訓設立の企画に参画され、更に直接その校長として、管理運営の衝にあたられたZ先生のことについて触れておきたい。Z先生はF総高訓の校長をやめられ、現在はH総高訓の校長として活躍しておられる。

Z先生は、文字通り、齒に衣させぬ物のいいかたをされる先生で、本調査のためH総高訓を訪れた筆者をじろりとみられ、「調査のための調査に終らぬように」といった趣旨のことをいわれるのであった。又職業訓練の現実からとかく遊離しがちな訓大のあり方については、訓大を代表してお叱りを受け、訓大の校長や教授は、職業訓練界の実状について知るためにも、総高訓の校長会議等に出席してもらいたいと主張されるのでした。

そして、中卒訓練にいつまでもとしがみついている職業訓練は、「稲作中心の東北型農政」の二の舞をふむものとして、きびしく批判され、高卒短期訓練の妥当性について力説されるのであった。又これからは養成訓練のみではだめで、どうしても総高訓は地域の職業訓練のセンターにならなければならないと主張し、現に中小企業を対象とする「職業訓練セミナー」をはじめられることを話して下さった。

ご自分は教育の専門家でも技術の専門家でもないのと謙遜されながら、実習場と教室の境はガラス張りにした方がよいのではないかと、その他諸々の改善策を出されるのであった。

職業訓練の体質改善が大変なエネルギーを必要とするものであることもよくご存知で、職業訓練界に身をおくようになり、その調査研究に従事するようになってから、あまり多くの問題をはらむ職業訓練の現実に、たゞ気ばかり重くなりつゝあった筆者に「職業訓練の問題を解決するためには、あせってはいけない。悲感的になってもいけない。はげしくそしておおらかにとりくまなければいけない。」と励ましの言葉をかけてくれるのであった。

全く、職業訓練の問題ととりくむには、まずはげしさとおおらかさが必要なようだ。

御教示いただいたZ先生には深謝したい。立志伝中のようなF総高訓のY校長先生にも大変お世話になり、かついろいろと教えていただいた。

又忙がしい時間をさいてご協力下さったたくさんの先生方にも、この紙上をかりて、御礼申しあげたい。